

三好十郎

美し人
卷三

三好十郎

美し人
卷三

著 者 紹 介

三 好 十 郎

1902 年 佐賀市生

早稲田大学英文科卒

主要著書	三好十郎作品集 全四巻	河出書房
	肌の匂ひ（小説）	早川書房
	炎の人（戯曲）	市民文庫

現住所 東京都世田谷区赤堤町 2 の 5 20

主 な 人 物

栗原東作 評論社の編集次長。戦争末期、憲兵隊のデッチあげたスパイ事件に関連して投獄され、戦後釈放されるが、獄中の無理がたたって、まもなく病死する。

栗原志乃 東作の妻。東作の投獄直後に生れた遺児昭と、姑のとしとを、女の細腕一本に抱え、美しい未亡人としてはげしい世相を生きぬいてゆく。

相良 浩 志乃の弟。石渡美奈子と許婚者の関係にあるが、学徒兵として出征、戦國機に乗って東京上空で戦死する。

石渡美奈子 東作の従妹。許婚者の浩を失い、中風の父清介、復員したモヒ中毒の兄清太郎、弟秀男、妹スミ子のために身を落して働きながら、絶望の人生を歩む。

平尾宗次郎 評論社の東作の下で働いていた男。終戦直前、満洲へ渡り、戦後帰国して大隅の世話で、銀座の三木宝石店につとめている。

大隅嘉行 戦時中、浩もその塾生の一人であったハニワ塾をひらいていた右翼団体の巨頭。終戦直前、大陸に渡り、戦後ひそかに帰国して、正宗と名をかえ、正宗法律事務所を中心に、右翼再建にとりかかる。

卷二までのあらすじ

昭和十八年——太平洋戦争まさにたけなわの頃……

評論社の編集次長栗原東作は、老母とし、美しい妻志乃と、平和な家庭をいとなんでいたが、日本の戦争政策の将来の悲劇を見通して、はげしい時代の流れにさからい、一人のインテリゲンチヤとして、真実に生きたいと望んでいた。しかし、戦争の変転につれて、言論報国会の風当りも強く、ある日、憲兵隊のデッチあげたスパイ事件の容疑者として警察に連行され、投獄されてしまう。この事件にひどいショックをうけた志乃は、警察で産気づいてしまうが、ちょうどいあわせた女、横浜の土建屋横田組のおかみさん、——お、だいと子分の辰造にたすけられ、病院にかつぎこまれて、そこで長男の昭を出産する。

東作の従妹石渡美奈子は志乃の弟相良浩と許婚者のような関係にあるが、浩は右翼結社ハニワ塾にはいり、その指導者大隅嘉行の感化をうけて、血の氣の多い右翼青年となり、帝都防空特攻隊に参加して、B 29 編隊に体当りを敢行、東京上空に散華する。浩の戦死を知った志乃はハニワ塾に大隅をたずねるが、大隅はすでに日本に見切りをつけて大陸に渡り、ヨウとして行方を絶っている。一方、東作なきあとの評論社はたちまちつづれ、東作の部下の平尾は、内地を逃れ、満洲に去ってゆく。こうした悲劇をはらんだまま、日本は敗戦の日を迎える。

その日、美奈子の父清介は突然脳溢血に倒れ、敗戦とともに釈放された東作も、獄中の拷問がたたつて、まもなく病死する。志乃は遺児昭と姑のしを抱え、戦後の混乱のなかをさまざまに職をかね、遂に靴みがきにまで身を落して働くが、ふとしたことから満洲へいったはずの平尾にめぐりあい、平尾の世話で、平尾のつとめている銀座の宝石商三木ジュエリーにつとめることとなる。

美奈子は恋人浩を失った打撃と、病に倒れた父清介、復員してきたモヒ中毒の兄清太郎、二人の弟妹をかかえた重荷から、キャバレー・ラビールのダンサーに身を落すが、そのマネエジャア釘村に脅迫され、過労に弱った体をいつしかモヒ患者に仕立てられてゆく。そうした美奈子に心を寄せている医学生花田は、いたって気の弱い男だったが、釘村の暴力におびえながらも、ひそかに美奈子をつれだして横浜の一色病院にあずけてしまう。一方、ハニワ塾の指導者大隅は、戦後ひそかに東京に舞いもどり、姓も正宗と変えて、正宗法律事務所を中心に麻薬の密輸を行いながら、政界の黒幕として隠然たる勢力をのびし、右翼再建にとりかかる。実は三木ジュエリーもキャバレー・ラビールも彼の支配下におかれているのだが、大隅にあつたことのない志乃は、正宗が大隅だとは気がつかずにいる。

平尾は大陸にいた頃、ひよんな縁で大隅と知りあい、片腕となつて働いていたのだが、だんだん志乃に心をひかれるようになるにつれ、かつての東作の生き方を正しいと信じるようになり、大隅の手から離れる決心をするが、美奈子のことから、釘村に短刀で刺されてしまう。

そのしらせをきいた志乃は、他人ごととは思えぬ胸さわぎをおぼえて、平尾のもとへ駆けつけようとするが、見知らぬ男に呼びとめられ、平尾と関係をもたぬよう忠告される……

題字
三
好
十
郎

美
し
い
人
卷三

正宗という男

裏の竹やぶをときどき風がサァーッと通りぬけていった。

すこし離れた本堂の方から、夕方の簀行こしぎようの木魚の音と鐘の音がきこえてくる。

ここは正宗が住んでいる郊外のある寺の離れだった。

正宗の妹の恒子はその離れから本堂に通じるまわり廊下の隅のところで、夕餉ゆうけの仕度をしていた。

十三、四歳くらいになる民子は、忙がしそうにたちはたらく恒子に向って、変にひしゃげた鼻声で話しかけていた。

「ねえ、お姉さん！」

「なあに？」

「ねえ、お姉さんよ？」

「なあに、民子ちゃん？」

「あの、ここは東京でしょう？」

「そうよ、東京よ」

「でも、変だなあ」

「どうして？」

「だって、こいじゃ、広島よりもさびしく」

「うん、それはね、ここらは東京といったって、ズーッとはずれの方だから、こうなの」

「ふうん、どうしてお姉さんの兄さんは、こんなところに住んでおいでかな？　それも、こんな竹やぶのなかのお寺なんどに？」

そういいながらふり返って、裏の方に目をやった民子の顔は、目鼻立ちのくすれた異様な面貌であった。原子爆弾のためにできたケロイドが、無慚に顔一面をおおっていた。

「そうね、キット、なんでしょ、お母さんのお墓がこのお寺にあるから、そいで、お寺さんにこの離れを貸してもらったんでしょ」

「へえ、すると、小父さんのお母さんなら、お姉さんのお母さんでもあるんでしょ？」

「そうよ」

「すると、おとついで、ここに着いてすぐ、お姉さん、おまいりをしたのが、お母さんの墓？」

「ええ、そう」

「だけど、あの石塔には、正宗家の墓と書いてあったけ。どうしてお姉さんの苗字とちがうの？」

「それは、チョットわけがあって、お母さんとは籍が別になってたから」

「ふうん……」

民子は口をつぐむと、何か考えている。

「さ、できた」

いち、いんにかけた鍋のふたをあけてなかをのぞいてから、恒子は立ちあがって民子にいった。

「……兄さん、おそいわね。民ちゃん、おなか空いたでしょ？」

「ううん」

「兄さん、今日は早く帰ってくるってたから、もう、まもなくだわ……」

恒子は室内にしつらえてあるチャブ台のうえに、ドンブリや小皿をおきながら民子にいった。

「明日あたり、東京のにぎやかなところ——銀座だとかなんかへ、いってみましょるか？」

「ホント？ つれてって……」

民子はうれしそうな叫び声をあげたが、すぐに、

「……んでも、いいわ、そんなところ、ゆかなくとも、ええわ」

と、沈んだ声になった。

「どうして？ だって、民ちゃん、楽しみにしてたんでしょ？」

「でも……広島なら、いいけど、東京だと——」

「え？」

民子は急に快活にクスクス笑いだした。

「……フフ！ あのね、きんにょ、この駅んとこへ、お姉さんと買物につれてってもらったでしょ？ あんとき、小さい男の子が、あたしの顔を見てね、あ、オパケ！ っていた。フフ！」

「ああ……それは、しかし——」

「ううん、なんともない、私、何ともないの。けど、広島なら、ほかにもどっさり私みたいのがおるから、なんだけど、東京だと、人がビックリする」

恒子はいたましそりに民子を見ながら、やさしく、靜かな声でいった。

「……民子ちゃん」

「はい」

「民子ちゃんは、お姉さんと二年あまりいっしょに暮してきてる。それで、だから、私のいうこと信用できるわね？ 信用するわね？」

「信用する」

「だからね、私がキット東京でよいお医者を見つけて、民ちゃんの顔、なおしてあげる。兄さんにも、そのこと頼んであるの。キットなおしてあげるわ」

「……うん」

「しかしね、いくらりっぱなお医者さんが手術してくださっても、もしかすると、なおらない……か

もしれない……今まで、サンザン、いろんな手当てをしても、どうにもならなかったのだから、今後
も、もうなならないのかもしれない。そうだわね？」

「うん」

「すると、いつまでたっても、民ちゃんは、バケモノといわれる。それで、やってゆかなきゃなら
ない。そうだわね？」

「うん」

「そしたら、バケモノでやってゆきなさい。ただ、そのときは、このお姉さんもバケモノになってあ
げる。それで、お姉さんといっしょに、バケモノで生きてゆくのだ。人がびっくりしようが、人が嫌
おうが、かまわずニコニコして、なんかお仕事をして、いっしょにやってゆくよ、どう、ゆける？」

「うん、ゆける。お姉さんといっしょなら」

「そう……ありがとう」

民子の素直な返事をきいているうちに、恒子はジーンと眼がしらが熱くなってきた。そのとき、不
意に裏の竹やぶのなかに、誰かが石を投げこんだらしく、石が竹にあたるとぶ、さえた音がきこえ
てきた。それが、二度、三度……。

「あらー！」

と、びっくり声をだした恒子に、民子は笑いながらおしえた。

「あれはね、お姉さん、この裏の方の男の子が、いたずらに石を竹やぶのなかに投げるの。昨日も投げたわ。お姉さんが使いにいった留守に」

「そう？……でも、いい音だわね」

いいながら、なおも恒子がうかがう竹やぶのあいだの小道を、二人の男がこちらへ近づいてきた。

「ああ、小父さん、お帰りになった！」

民子がいちはやく正宗をみとめて叫んだ

「そうのようね」

「恒子、今、帰ったよ」

正宗は、おだやかに笑いながら、声をかけた。

「お帰んなさい」

正宗は迎えに立った恒子を、つれの青年に紹介していった。

「河合君、これは二三日前に広島から上京してきた妹だ」

「はあ、僕は河合と申します」

長身のガッシリとした河合は、いくぶん固くなって挨拶した。

「恒子と申します。よろしく」

「小父さま、お帰んなさい」

民子は恒子のうしろから正宗に大仰なおじぎをしながらいった。

「やあ」

「おっ、これは！」

河合はいきなり民子の顔を見て、思わずギクッと息をのんだ。

「……ハハ、いや、河合君、これは広島で爆弾をかぶった子で、恒子がつれてきた——ハハ」

「……そうですか。どうも、失敬しました」

「どうぞ、おあがりくださって——」

恒子のすすめを辞退しながら、河合は正宗にいった。

「いや……先生、では、僕はこれで失礼します。ほかにご用はありませんね？」

「そうかね、そいじゃ、いや、別に用はない……だが、夜おそくまで、この近所を、君たち、歩いたりしてくれているらしいが、ご好意はありがたいが、そんな必要はないから、やめにしてほしい」

「それは、しかし、われわれが好きでしていることでして、先生はご存じないことです。すておいてください。それに、相手が警察などでしたら、そういう必要もないでしょうが、近頃、そんなんじやありませんので」

「いやいや、もしそうだとしてもだ、それがそうならば、いくら警戒しても、同じことじゃないかね。とにかく、やめにくれるように」

「……いうだけはいつとききます。それから、さっきのお話の、ラビ一の釘村という男のことですが、どう処置しましょうか？」

「うむ、どうするといつて、私にも別に考えもないが、そういう男を、いつまでも詰らんことで騒がしておいては、よくないかもしれんね……しかし、また逆に、そういうのを薬の件だけにかぎって、アッサリ向うに渡してやるのも、かえってよいかもしれない。警察でも、ときには成績をあげなくちゃならんんじゃないかな。ハハ」

「わかりました。では、適当に——」

「くれぐれも、しかし、手荒いことは避けてくれるように」

「承知しました。それでは、これで」河合は正宗に一礼してから、「ごめんください」と、恒子に言葉をかけ、足早に立ち去っていった。

「失礼いたしました——」

恒子は河合を見送ると、室内にあらがった正宗に、

「……兄さん、顔お洗になります？」

と、たずねた。

「いや、よかろう……やあ、大変なご馳走ができたようだ、ハハ。ええと、民、民子ちゃんだったけな、どうした？」